

『トムは真夜中の庭で』における内なる庭園 —楽園創造と楽園喪失—

Inner Garden in *Tom's Midnight Garden* —Image of the Paradise—

山 口 三千香

目 次

序論

第1章 裏庭と弟を心に刻んで

第2章 秘密の庭園

第3章 内なる庭園

結論

序論

少年トムは、弟のピーターがはしかにかかったため、家族と、慣れ親しんだ裏庭を離れ、初めて行くアランおじさんのアパートで過ごすことになる。お婆さんの家には、庭というものはなく、周辺の近代化した風景もトムの孤独にますます拍車をかけた。そのアパートには、バーソロミュー夫人の持ち物であるというビクトリア朝時代から時を刻み続ける大時計がある。その時計は、老朽化のせいもあり正確な時間を打つことはほとんどない。ある晩、その時計が13時を打ったとき、その不思議な時計の文字盤を見るため、裏口から月の光を照らそうと扉を開けた瞬間、一面に広がる秘密の楽園を見つける。そこでトムは両親を亡くし、その邸宅の親戚に引き取られた少女ハティと出会

う。そこで、彼らはそれぞれの孤独を分かち合い、成長してゆく。少年のままのトムはその庭園で、少女ハティの幼少時代から結婚するまでの姿を見る。しかし、その庭園は永遠に存在するものではなかった。トムの、時を永遠に変えたいという祈りも虚しく、ハティの結婚が近くなるにつれ、トムの姿は薄れてゆき、二度と少女ハティと過ごした庭園はトム目の前に現われなかった。この論文では、少年トムが、裏庭を失い、やっと秘密の楽園を発見し、そしてまたその楽園を失うことにより、心の中にいかなるものを獲得して、家族の待つ家そして裏庭へ戻ったのか、トムにとっていつの時も心の中に存在する庭園と楽園のイメージを辿りながら考察する。

第1章 裏庭と弟を心に刻んで

トムと弟ピーターは、休暇を裏庭で過ごす計画をたてていた。裏庭の空地にある一本のリンゴの木に家を作る計画だ。しかし、ピーターがはしかにかかったため、トムは、数週間グエンお婆さんの家で過ごす事を余儀なくされる。この上ない絶望感の中、ロング家の裏庭とピーターを目に焼き付け、母親に見送られ、迎えにきたアランおじさんと、グウエンお婆さんが待つアパートへと向かう。

トムにとって庭は生活の一部で、庭を離れること、弟から離れること、家族から離れることは精神的に大変大きな決心を要したことがうかがえる。

第2章 秘密の庭園

“He(Tom) looked his good-bye at the garden, and raged that he had to leave it-leave it Peter. They had planned to spend their time here so joylously these holidays.” (1)

“Town gardens are small, as a rule, and the Long's garden was no exception to the rule; there was a vegetable plot and a grass plot and one flower-bed and a rough patch by the back fence. In this last the apple-tree grew: it was large, but bore very little fruit, and accordingly the two boys had always been allowed to climb freely over it. These holidays they would had a tree-house among its branches.(1-2)

このように、ピーターとトムにとって庭は特別な欠くことのできない楽しみのものであることがわかるし、通常、家庭に庭がないことをあまり好ましくないと考えていることがうかがえるし、大人もまた、子どもにとって庭でさまざま遊びを想像することを好ましいと考えていることがうかがえる。

楽しみを失ったトムは、絶望感に満たされながら、おじさんの家にたどり着く。しかもおじさんはイーリーの大聖堂の前を車で通ったにもかかわらず、その絵はがきを買ってはくれたが、登らせてはくれず、好奇心旺盛なトムの孤独にますます拍車をかけた。このような絶望感の中、少年トムはいかに、勇気や好奇心を伴って、自らの力で、今まで家族と過ごした庭のイメージを拡大させて自らの庭のイメージを確立していったのか、第2章で論じたい。

トムは、おじさんたちキットスン一家の住む大きな邸宅にたどり着いた。そこは寒々として、家の庭を失ったトムにとってはとても辛いものであった。だが、ただひとつ、トムの興味を引いたもの、それは邸宅のホールにある、背の高い箱入りの大時計。バーソロミュー夫人の思い出の大時計であった。針が指す時間は正確であるが、時間の数が正確に鳴ったことはなかった。それは、かえってトムの好奇心を旺盛にした。

眠りにつけないある夜、トムはこの大時計が13時を打つのを聞いた。トムは大時計の針がなにをいったのか確かめずにはいられなかった。トムは月の光に導かれ、一階の大時計のところにたどり着いた。とても暗闇で電灯のスイッチを探すができず、なにがなんでも大時計の文字盤を照らすため、月の光を入れようと裏口の扉を開けることを思いつく。おじさんの話だと、裏口から通じる裏庭は庭とはとても呼べないようなもので、舗装道にゴミばこが置いてあったり、住人たちが自動車を停めてあるという。その裏庭へ通じる扉を開けようと。邸宅の、いそぎなさい！いそぎなさい！というささやきに焦り、大時計の心配そうな眼差しに見守られて、トムは、その扉を大きく開いた。トムは、文字盤を確かめるより先に、裏庭へ一歩踏み出してみた。なんとそこには、おじさんが言っていた裏庭とはまったく違う美しい庭が広がっていた。トムは、大人たちが何を言おうと、芝生を全速力で走り、木に登って、茂りあっている枝ぶたいに木から木へとうつつて遊ぼうと決心した。庭を見つけたその日は、おじさんと10時間睡眠を約束していることもあり、文字盤を読むために早々に邸宅へ引き返したが、表側のドアが急に開き、トムの姿は見えていないであろう女中さんが現れたので、結局文字盤を確かめることはできなかった。トムは、ベットに戻って、あらためて魅力的な裏庭や今起こったとても信じられない出来事を鮮明に思い出し始める。何よりも、トムは、あるはずもなかった庭について考えずにはいられなかった。

“It was not as if the hall were of great interest, with or without a maid and all the rest; the garden was the thing. That was real. Tomorrow he would go into it: he almost had the feel of tree-trunks between his hands as he climbed; he could almost smell the heavy blooming of the hyacinths in the corner beds. He remembered that smell from home: indoors, from his mother's bulb pots at Christmas and the New Year; outside, in their flower-bed, in the late spring. He fell asleep thinking of home.” (29)

トムは、その庭園のなかで、惜しみながら離れた家の庭園や、見送ってくれた母を思い出させるヒアシンスの花を見つけ、この邸宅に来てからはじめて心の安らぎを得て、眠りについた。家を想う郷愁について、マーリオ・ヤコービは次のように述べている。

「……郷愁は、家を離れていると感じてはじめて覚える。……そこで郷愁の対象が、決して個人としての現実の母親ではなく、内なるイメージとしての母親であって、外部の現実にはないか、もはやなくなったもの、おそらくははじめからまったくなかったものであることがわかる。それはむしろ自身の幸福という、本来は母親の世話と抱擁に委ねられていたものへの憧れであり、葛藤を知らぬ一体的現実のなかでの手厚い保護への憧れであって、その一体的現実が象徴的形態をとったものが楽園のイメージにほかならない。……その憧れは自己疎外を解消し、自分の全体性と合体しようという努力に向けられている。」²

このように、家族がいる庭を断腸の思いで離れ、郷愁を覚えながら、暗闇を恐れずに、秘密の庭を見つけたトム。これは、絶望感の中でも、彼の、何かを見つけて楽しみたいという前向きな好奇心が勢いよく芽生えたと考えられ、その結果、新しい扉を開けて、母親や家庭の庭のイメージを超えて、家の庭だけでは経験することが出来ないさまざまな出会いや不思議な出来事をこの新たに見つけた庭園で経験することとなり、自らの中に、さらに大きな内なる庭のイメージを確立することとなる。

この大時計が13時を打つと現われる不思議な庭は、翌朝はなくなっていて、もちろん大人たちには見えないもので、おぼさんには、こんな季節にヒアシンスが咲くはずがないと言われてしまう始末。だがその不思議な庭と現実の庭には共通するイチイの木があった。塀の向こうにあるイチイの木。トムはそのイチイの木に登り、なにかのきっかけを探す決心をした。その決心を早速、弟ピーターに手紙で知らせた。これは弟との秘密にしたかったし、大人にはわかってもらえないであろうという諦めもあったに違いないが、これからピーターに書く手紙には、「B.A.R.」(ヨンダラ、モヤセ)と書くことにした。

トムは、邸宅でかけがえのない庭が夢ではないか、失うのではないかという不安にとらわれながらも、ひとりで、毎晩のようにその真夜中の庭を訪れた。庭園は、決してトムを見捨てなかった。

トムは、イチイの木にはじめて登ったり、女中さんや園丁を見たり、子どもたちを見る。ある嵐の日には、雷鳴の轟きとともに衝撃的なモミの木の倒木を目にする。モミの木の倒木とともに頭の上から聞こえてきたさびげ声は忘れがたいもので、衝撃的な出来事であったが、あくる日、庭園を訪れるとモミの木は以前と変わらず悠然とそびえ立っていた。トムは、この出来事で、不思議な庭園では、さまざま時が交錯していることがわかった。このような興味深い庭園は、いつの間にか、家から離れた孤独感を癒し、少年のあらたな好奇心は次第に大きくなり、ずっとその庭園にいたいと思

うようになった。

“He wanted above all to stay here - here where he could visit the garden. His home now seemed a long, long misty way away; even Peter was a remote boy with whom he could only correspond by letter, never play. The boys nearer to him now were called Hubert and James and Edgar - James especially. There was a girl too- but she was only a girl. What had her name been? Hatty…” (63)

ある日、3人の少年が早生のリンゴがなっている若木をとりかこみ、木をゆずってリンゴをゆずって実を食べていた。リンゴを取らずにゆずってとるあたりや、それを見ていた少女ハティに「スパイだ!」という少年の言葉や、ひとりひとりがリンゴを大急ぎで食べ、木から遠ざかり、足あとを消すために、靴のさきで地面をこするあたりは、旧約聖書のアダムとイブの原罪の場面を思わせる出来事である。この庭園には、旧約聖書の一場面を思わせる場面はいくつかあり、信仰深い園丁アベルの存在や何よりトムをこの庭園へと導いた大時計の文字盤の絵は、旧約聖書の黙示録を描写したもので、“time no longer”を現していた。

トムは、庭園で幼くして両親をなくしこの邸宅で、おばさんやいとこたちとの関係で孤独を感じながら過ごす少女ハティと友だちになる。トムの姿を見ることができたのは、この少女ハティと園丁アベル、そして犬のピンチャーだけであった。

トムと同じくハティも、この庭園を心の拠りどころとしていた。ハティはどんな時でも自分を待っていてくれるこの庭園で、空想をふくらませ、聖書の中の英雄や妖精たちの話やたくさんの秘密をトムに聞かせた。園丁アベルには彼を殺そうとした兄がいた話は、旧約聖書のカインとアベルの話そのものである。ハティはこの庭園をある種王国のような場所にしていたのだ。彼らは特に木のぼ

りに病みつきで、数あるイチイの木に名前をつけ、その中でも、「セント・ポール寺院の階段」と名付けたイチイの木に家を作り始めた。

“This tree - house, however, could be her own house and home, …” (126)

家がほとんど出来上がってもハティのこの木の家に対する夢は、トムに、欲が深すぎると言われるほど広がり続けた。鼻歌を歌いながら家の窓を作っているとき、ハティは木から落ちて気を失った。

次にトムがハティに会ったとき、ハティは以前より大人になっていた。ハティはトムに、大時計の文字盤の上の絵について話し、ふりこの鍵をあけて、文字盤の扉のとめがねをはずすことを約束した。次第に彼女の興味は、庭園での遊びより、庭園の外の世界に向かっており、次にトムがハティに会ったとき、彼女は、さらに大人になっていて、池の上でスケートを楽しんでおり、従兄弟やチャップマン家の娘たちや息子のバーディーたちとスケートに行くことを楽しそうに話した。文字盤についてのトムとの約束などすっかり忘れていたが、仕方なように、トムはどうしても文字盤を知りたいという探究心に答えて、文字盤をあげ、それは旧約聖書の黙示録第10章1から6まで、“time no longer”を表していることを教えた。

ある氷結の日、トムは、ジェームスの馬車に乗って、邸宅を庭園を離れ、ハティとスケートの旅へ出る。彼らは、イーリーの大聖堂で「時」を「永遠」にとりかえたこの町の紳士ロビンソン氏の記念碑を見て、庭園のなかでいつまでも遊んでいられる「時」を「永遠」にとりかえようと計画した。

そんな中、ピーターは、トムと離れ、始めてもらった、唯一“B.A.R.”と書かれていない絵はがきを見ながら夢うつつであった。彼は夢のなかでイーリーの大聖堂へ行き、トムとハティの前に一瞬現われ、すぐに消えた。ピーターは、はしかも直り、両親との退屈な日々で、トムとハティと

「セントポール寺院」に家を作ったり、庭園で一緒に楽しむ事を夢見ていたその強い願望と、トムからの絵はがきが途絶えた事で、ピーターの想像力が高まり、一瞬ではあるが3人を合わせたと思われる。

トムとハティが初めて庭園の外の旅をしたその帰り、将来ハティの結婚相手となる息子のバーディーが馬車で迎えに来て、ハティにはトムの姿が見えなくなっていた。これはトムの、庭園の時を永遠に変えるという夢はかなえられなかったことを表す。

第3章 内なる庭園

次の日の夜、トムは、あの庭園へ出る扉を開ければ花やイチイの木やあたたかい空気が自分を歓迎してくれると信じて、扉を開けたが、そこにはハティと過ごした庭ではなく、おじさんの家のクレオソートのにおいがする冷たい裏庭があった。トムは、必死でハティの名前を叫んでアパートの住人たちを驚かせた。

次の朝、昨日騒いだお詫びに、トムは3階に住む大時計の持ち主バーソロミュー夫人を訪ねた。ハティは、バーソロミュー夫人の幼少時代であることがわかり、おばあさんの部屋でふたりは庭園での思い出話に花を咲かせる。バーソロミュー夫人も幼少時代に唯一心の拠りどころであった楽園に回帰することで、自らの人生を振り返って、邸宅で閉ざしていた心をトムに開いたのだ。

大時計が12時を打った。トムは庭園を失う恐怖とおばあさんの記憶の中に思いがけずまた庭園を見つけられたうれしさからピーターのことを忘れていたことに罪悪感をおぼえながら、今度はピーターと共におばあさんのところに来る約束をする。トムは自分はやはり早く家へ帰りたかったのだと気づき、家族にあたたかく迎えられた後、早速、家の裏庭へピーターと行って、ハティとの庭園の話をしようと、おばあさんの温もりを胸に刻んだ。アダムとイブが楽園を失ったことにより、その楽園が内面化され、その楽園が人間の心の中で生き続け、精神的な支柱となったことを中島理氏は、

次のように述べている。

「そして『パラダイス・ロスト』の最後の場面では、生命力が躍動するような荒々しい「自然」は姿を消してしまう。それどころか、アダムとイブの楽園追放にあたり、それまで外的な自然であった「楽園」が、人間の主観性へと内面化されることになる。

そうなれば、お前もこの楽園を出てゆくことは嫌とは思わないであろう。

自分の内なる楽園を、遥かに幸多き楽園を、お前ももつことができるからだ。

(12巻585-87)

心の内にある楽園が、神から授かった外的・地理的な楽園よりも幸せだというのである。ミルトンの場合は、人間は自然に同化せず、人間の内面性が自然よりも優位に立つ。³

トムはハティとの庭園を失ったが、この夏の数週間に、彼の心の中には永遠に生き続ける内なる庭園を得た。この庭園のイメージは、トムがこの夏の旅をしなければ得られなかったものである。この経験によって、トムがいない間、ピーターが裏庭のリンゴの木に作った中途半端な家に、トムは自分なりの家を作り、その内的な成長ぶりは家族や弟を驚かせたことであろう。

結論

トムは、家の庭を失って、その郷愁に停まらず、新たな自分の場所を生み出そうと、はてしない想像力と勇気で、秘密の庭園を見つけ仲間ハティと出会った。この新たな場所を見つけようとする子どもの力については、ピアスが「……子供というのは潜在的に大人だと言う点です。例えばほんの小さな子供でも、偉大な科学者と同じような、抑えがたい好奇心を持っているものです。」⁴と述べている。また、「私は兄二人と姉二人とよくあの庭で遊びました。隅々まで知りつくした大好きな

庭でした。……何世代もの子供がこの庭で遊び、立ち去っていったこと、そして庭が時とともにどのように変わったかということを思いました。悲しい変化もあったことでしょう。そうして私はひとつの物語を作り始めました。』⁵と述べ、作者自身、この物語を書くにあたり、自らの心に生き続ける心象風景の庭を鮮明に思い浮かべたこともわかる。

このトムに秘密の庭は、大人には見えない存在であったし、弟ピーターには絵はがきで話したが、両親には断じて秘密のものであった。ハティも時計の音をわざと聞き間違えてまでその庭園での遊びを楽しみ、想像力を膨らませ、秘密の物語を空想しトムとわかちあった。秘密に関して、河合隼雄氏は、「秘密をもつということは、取りも直さず『これは私だけが知っている』ということなので、それは『私』という存在の独自性を証明することになる。秘密ということが、アイデンティティの確立に深く関わってくるのもこのためである。』⁶と述べていることから、トムは秘密の庭を巡ったことにより、内的に成長したことがうかがえる。

また、自然の中での体験を通して得られる内的な自然を持つことの重要性について養老孟司氏は、次のように述べている。

「……今自然保護ということをよく言われますが外側の自然が失われていくということ、我々の心の中から自然が失われていくのとほとんど並行した現象だと思います。外の自然がなくなるから人間の心の中の自然が失われていくという面もあれば、人間の心の中から自然という、つまり何ものかもしれないもの、先の読めないもの、気味の悪いもの、そういう統制できないものの、そういうものが失われるにしたがって、外の自然が失われる。私はたぶんそれは並行した現象であるというふうに考えています。』⁷

トムにおける庭、すなわち家の庭、ハティと楽しんだ庭には、いつも木のイメージがある。Treeには、ゆっくりとした人間の個性化の過程を表す意味もあり、⁸ 木は、人間の内的成長のシンボルともいえるであろう。

自然の中で、楽しいこと、苦しいこと、仲間と新たな遊びを想像し遊ぶこと、そして人間の痛み、悲しみ、そして喜びを分かち合うことを経験することは、自らの自我の確立にとっても重要であり、そこで確立した確固たる心の場所は将来、苦境に立ったときでも、その人を救うこととなるだろう。

トムは、近代化したおじさんの家の庭で孤独を感じ、探究心と想像力によって秘密の庭を心に刻み、現実の庭に戻って、心の中にさらに鮮やかな永遠の庭を獲得した。また、老人であるバーソロミュー夫人との対話では、世代を超えた共感のすばらしさを知り、彼の人生で支柱となる内的成長を遂げて、心の中にいつも生き続ける永遠なるものを獲得したのである。このようなトムの探究心と想像力は、近代化した風景が多い現代、人間が内的バランスを保ちながら生きてゆく上で大切なものと思われる。

註

- 1 テキストはPhilippa Pearce "Tom's midnight garden" Puffin, 1976年、による。
- 2 マーリオ・ヤコービ 『楽園願望』 紀伊國屋書店、1988年、22、23頁
- 3 中山 理 『イギリス庭園の文化史A Cultural History of the English Garden』、大修館書店、2003年、169、170頁
- 4 フィリッパ・ピアス 『ガラスの上の物語 ガラスの向こうの物語』(講演シリーズ・「子どもの本を考える〔2〕」)、朝日ジャーナル、1986年、93頁
- 5 Ibid. 94頁
- 6 河合 隼雄 『子どもの宇宙』岩波書店、1994年、36頁
- 7 養老 孟司 『脳と自然と日本』白日社、2001年、105頁
- 8 アト・ド・フリース著 『イメージシンボル事典』大修館書店、1984年、652頁